

近代の「涙」は何に譬えられたか*

羅工洙**

gsna@ynu.ac.kr

Contents

- I. はじめに
- II. 分析結果
 - 1. 比較的多用されるもの
 - 1.1. 「露」
 - 1.2. 「玉」
 - 1.3. 「雨」
 - 1.4. 「滝」
 - 2. 自然系統
 - 2.1. 「地形と水」
 - 2.2. 「降雨」関連
 - 3. その他
- III. おわりに

I. はじめに

文學における「涙」の表現は、読者をして感性を呼び起こしめる重要な素材の一つであると思われる。現代は涙を流す人も少なくなったという指摘があるが¹⁾、近代の種々の文學作品を通して見ると、実に色々の表現がある。勿論一作品に多くの用例が現われるわけではないが、種々の作品を通して用例を拾ってみると多様な表現が見られる。

涙は近代文學における主要な素材であるにも関わらず、涙と関連した研究は殆んどない。中里理子²⁾には中古から近代までの「泣く・涙」について考察した論

* 本研究は2013年度嶺南大学校第2次研究支援費により作成された。

** 嶺南大学校 日語日文学科 教授

1) 柳田国男(1962)『涕泣史談』(世良正利の『日本人の表情』、『日本人の性格』1970、朝倉書店、p35)

考があるが、オノマトペの種類増加やいくつかの涙の表現について言及するのみで全般的な傾向は分からない。一般的に文学作品に現われる「涙」の表現を見ると、「涙を流す」とか「涙に暮れる・涙が出る・涙が溢れる」のような平凡な表現が大部分を占めている。にもかかわらず、レトリックと関係する表現も少なからず現われている。

筆者は近代文学作品における涙の表現について以下のように考察したことがある。

①「紅涙」について³⁾。古来、美人の女性が流す涙を意味していた「紅涙」が、近代には美人だけではなく全ての女性に対して用いられていたのみならず男にも用いられ始め、現代に至っては老若男女はもちろん中性的な存在に対しても用いられるようになるなど、意味用法上の拡大があったことを明らかにした。

②近代における数字を伴う涙について⁴⁾。「一滴の涙・一雫の涙・両行の涙・一点の涙」のような比較的自然的な涙の流し方の表現だけでなく、「一掬の涙・千行の涙・万斛の涙」のように大げさなレトリックを加味した表現も多用されていたことが明らかになった。このことから、数字とそれに伴う量詞によってレトリックの効果を高めていたことがわかった。

③近代にはどういう感情で涙を流していたのかについて⁵⁾。涙を流すとき、特別に感情移入をしないで流す涙が大部分を占めているけれども、文脈に合わせて感情を込めた表現も少なからずある。例えば「悲涙・喜涙・愛涙・憤涙・同情の涙・血の涙・熱涙」などのようなものが多く、少数ではあるが非常に細かい感情表現が発達していたことも分かった。

このように涙に関する考察を行ってきたわけであるが、実際の作品の中でも尾崎紅葉や岩谷小波が「涙を主眼とす」と作品の序文で述べているくらいであるこ

2) 中里理子(2004)『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—上越教育大学研究紀要第24巻第1号pp304-316

3) 羅工洙(2010)『近代における「紅涙」について』『日本近代学研究』第30輯、韓国日本近代学会pp7-31

4) 羅工洙(2012)『近代における数字による涙の修辞』『日本近代学研究』第37輯、韓国日本近代学会pp7-30

5) 羅工洙(2013)『近代における感情表現としての涙のレトリック』『日本近代学研究』第43輯、韓国日本近代学会pp7-33

とからもわかるように、近代の作家が涙に関心を寄せていたことが窺われる。そこで本稿では、近代の文学作品を通して「涙」の諸相を明らかにする一環として、「涙」を何に譬えて表現したのかを中心に考察してみたい。先行研究③のような感情表現の問題とは異なり、「涙」を流す表情・様子を他の言葉に置換してその文脈を分かりやすくしようとする所謂比喩の問題について考察しようと思う。比喩とは周知の通り、表現したいものを他のものに譬えて表わすことである。中村明は、比喩の目的について次の二点を述べている。

一つは、送り手の伝えようとする物ごとを、受け手が全く知らないために、そのまま言いあらわしたのではわかってもらえないと判断した場合である。

もう一つは、送り手の伝えようとする物ごとについて、受け手がいくらかわかっているのに、そのまま言いあらわすこともできるが、送り手としてはそれを強調したい、という場合である⁶⁾。

上の説明のように、譬えることによって分かりやすくする、または強調するような目的をもって比喩を用いることがわかる。比喩には種々の種類があるが、ここでは「直喩」と「隠喩」を中心にして考察していきたい。周知のとおり「直喩」とは「ようだ・如し・みたいだ」などを同伴するものであり、「隠喩」とは直喩のような指標を隠して表わす表現である。

本稿で調査対象とした近代文学の資料⁷⁾をかなり調査したのだが、それらの資料には涙に関する直喩や隠喩のデータがそれほど多くは見られなかった。しかし、本稿で拾った用例は、近代における涙関連の比喩の使用実態を把握するには大きな問題はないと思われる。

6) 中村明(1977)『比喩表現の理論と分類』秀英出版、p18

7) 今回調査した資料は、『明治文学全集』(筑摩書房)・漱石全集(岩波書店)・紅葉全集(岩波書店)・鏡花全集(岩波書店)・逍遙選集(第一書房)・荷風全集(岩波書店)、『明治初期翻訳文学選』(雄松堂書店)、部分的には『鴉外全集』(岩波書店)・『内田魯庵全集』(ゆまに書房)・『露伴全集』(岩波書店)・『斎藤緑雨全集』(筑摩書房)・『蘆花全集』(新潮社)・『啄木全集』(筑摩書房)・『リプリント日本近代文学』(国文学研究資料館)・『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』(大空社)・『新日本古典文学大系 明治編』(岩波書店)・『明治文化全集』(日本評論社)など。本稿で取り上げている用例数は、あくまでも現在まで調べて得た結果であり、もっと調べれば当然変動はある。また、新しい用例が発見されても用例数の出入りはあると思われるが、論旨が変わるようなものではないと思われる。

研究の手順としては、まず譬えられた指示内容を分析してみて、比較的多用されているものから順に考察していきたい。このような考察から得られる結果と先行研究の成果とを総合することにより、近代の涙に関するレトリックの全貌が明らかになると思われる。のみならず、近代前後の時代との比較研究や通時的研究を行う端緒ともなりうるし、日本文学における「涙」の文化についても把握できるものと思われる。

Ⅱ. 分析結果

涙を他の言葉に代替させる場合は、涙が持つ液体の属性から見て水分があるものに譬えることはいうまでもない。当然ながら、譬えられるものは殆んどが自然物である。中でも、液体やそれに準じるもののうち、涙と類似性のあるものが大部分である。勿論、液体ではないものもある。では、涙の譬えとしてどのような修辭的描写をしているのかを具体的に見ることにする。考察にあたり、譬えられるもののうち比較的多用されているものは個別的に考察し、相対的に少ないものは「自然現象」を一纏めにして考察することにする。それから、このほかにも「その他」のところで、別項目を見ることにする。

1. 比較的多用されるもの

1.1. 「露」

『日本国語大辞典』第2版(以下『日国大』と呼ぶ)の「露」の欄を見ると、①「大気中の水蒸気が冷えた物体に触れて凝結付着した水滴。夜間の放射冷却によって気温が氷点以上、露点以下になったとき生じる。また雨の後に木草の葉などの上に残っている水滴をいう」、②「『涙』の比喩として用いる。多く①の意味を持たせて用いる」とある。辞書に「露」が涙の譬えとして用いられていることがはっきりと明言されているので、日本では一般的に用いられている譬えのように思われる。「露」には「儂い」とか「少し」の意味もある。このことから考えてみると、涙の

譬えとしての「露」からは量的に涙を多く流すことは連想しにくい。では、直喩の例を見てみよう。

一星^{ほし}あり、一座^{ひとつ}、露^{つゆ}の如く涙^{なみだ}を照^{てら}す。(『芍薬の歌』泉鏡花、大正7年7月、鏡花全集18巻、p249)

與三の怖^{おそ}い眼^{まなこ}から、露^{つゆ}かとばかり涙^{なみだ}が滴^{したた}つた。(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p228)

「涙」を表す「露」の譬えは基本的に用いられていないようである。「露」は動的なものではなく静的で、さらに消えやすいものであるので、「涙」とつながる後項動詞との連結が不自然に思える。そういうわけか、泉鏡花が用いた例も「流す」系の動詞ではなく「照らす」になっている。また、「～かとばかり」の例では「まるで～のよう」であることが後項動詞「滴る」につながるから直喩であるといえよう。ともあれ、一般的にみて「露」の直喩の例は基本的にほとんど見られないようである。一方、隠喩を表す場合は事情が異なる。

正しく座^まして双^{さう}の手^てを膝^{ひざ}におきそふ、涙^{なみだ}の露^{いかり}は憤^{いきり}りと恨^{うらみ}みの朝^{あさ}日に干^ひて。(『縁蓑談』須藤南翠、明治21年、明文全5、p379)

顔を染^{しめ}々と合^あせたが、見返^{みかへ}り見送^{みおく}る眼^{まなこ}の中^{うち}にははや堰^せきあへぬ露^{つゆ}の涙^{なみだ}。(『若葉』石橋忍月、明治26年1月、明文全23、p329)

「嗟^あ矣^あ幾^{いく}程^ら歎^{なげ}いても仕^{つか}方がない」といふ口^{くち}の下^{した}からツイ袖^{そで}に置^おくは泪^{なみだ}の露^{つゆ}。(『浮雲』二葉亭四迷、明治20年、明文全17、p7)

眼^{まなこ}の波^{なみ}の露^{つゆ}重^{おも}たげに筆^{ふで}を執^とり紙^{かみ}おし伸^のべて(『涙』斎藤緑雨、明治21年6月、斎藤緑雨全集6、p19)

樸^{ぼく}ガ相^あ思^{おも}ノ涙^{なみだ}ヲ露^{つゆ}トシテ開^{ひら}ケ所^{ところ}ノ者^{もの}ナレバ～(『寄想春史』織田純一郎訳、明治12年、国会図書館蔵本、p1ノ85)

彼^{かれ}は眼^{まなこ}眶^{くわ}に哀^{あは}れな露^{つゆ}を一杯^{いちぱい}に溜^ためてゐる。(『侠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p160)

オオお前^{まへ}の留^{とど}守^もに差^さ配^{はい}どのが見^みえられてといひさしてしばたたく臉^{おもて}の露^{つゆ}
白^{しろ}岡^{おか}鬼^{おに}平^{へい}といふ有名^{めいめい}の～(『別れ霜』樋口一葉、明治30年1月、明文全30、p13)

我は幼時より親戚の情けの露の恵みに、人となりぬ……(『流水日記』馬場孤蝶、明治27年3月、明文全32、p322)

夕の背戸に泣き沈む乙女の涙露とちり(『小塚空谷篇』、明治33年4月、明文全83、p342)3

「露」の場合、直喩を表わす例がとても少ないことが一つの特徴であった。それに反し、隠喩は「涙の露」(36例)「露の涙」(2例)「泪の露」(1例)のような例が基本的に用いられていたことがわかった。「～の～」のような形が基本的な隠喩の形であるが、「涙」を伴わない例も含む自由な形である「その他」(35例)の例もかなり見られる。その中には、斎藤緑雨の「眼の波の露」(2例)とか「瞼の露」(3例)・情けの露(1例)などもあるが、独特の隠喩であるといえよう。上のような例が涙の表現としての「露」の例であるが、もっと細かい表現も見られる。

と云ふ目は晃耀いて、涙の露滴に光異しき色を放つた。(『侠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p166)

彼は又たほろりと泣いたのである。於戯此の一滴露! 什麼事にも此の姉の其の眼眵から此の滴露が溢れて、零ちて、(『侠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p172)

彼はほろりとし其の涙露を驚攫みの手拭で横に払つた。(『侠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月、明文全89、p238)

別れに握る手の甲に。置は泪か白露の。滋き山路の草ふみ分て。(『西の洋血潮の暴風』桜田百衛、明治15年、明文全5、p17)

叱られる様な事で御座りましよと下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ。(『われから』樋口一葉、明治29年5月、明文全30、p154)

坐ろ涙の露の玉、こぼれて庭の萩の花、(『自由艶舌女文章』小室案外、明治17年9月、明治文化全集21、p55)

何時より出で居し涙なりけん、人の情の凝りて滴る露の真玉はばらりと墜ちたり。(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p220)

圖らず眼と眼と相射しが、はやくもお龍は男の睫毛に怪しき露の珠あるを見たり。(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p271)

露の玉の緒に果敢なく物を思はする(『小夜千鳥浪の音信』三品蘭谿、明治16年6月、『リプリント日本近代文学』p108)

雲の行方さへ末は涙の露雲身にふりかかる親と子が~(『小夜千鳥浪の音信』三品蘭谿、明治16年6月、『リプリント日本近代文学』p56)

君の身を我と較べて袖に置く涙の露の玉章に思ひの~(『涙』斎藤緑雨、明治21年6月、斎藤緑雨全集6、p51)

其手懸りも泣く涙露の玉の緒絶果てあなたに残る~(『紅涙』斎藤緑雨、明治22年3月、斎藤緑雨全集6、p61)

父の恩恵の深きに感じ溢す眼の露雲玉の姿も愁ひ顔うつぶく(『憂喜世の夢』斎藤緑雨、明治19年8月、斎藤緑雨全集5、p141)

やがて睫毛に露の球が浮んだ、一滴零りと砕けて落ちると、彼女は顔を掩ふて泣き伏したのである。(『女夫波』田口掬汀、明治37年1月、明文全93、p311)

死したる人の如くなれど、泣腫せし臉にも今は涙の雲はなし。(『細君』坪内逍遙、明治22年1月、逍遙撰集別冊1、p863)

御優しい御心根に涙がこぼれます、とほろりと一ト雲溢されて憎からう筈無く、(『新浦島』幸田露伴、明治28年1月、露伴全集2、p227)

基本的な「涙の露」のようなものの他に、「露滴」(1例)「滴露」(1例)「涙露」(1例)「露雲」(3例)「白露」(1例)「露の玉」(7例)「一滴露」(1例)「露の球」(2例)「露の真玉」(1例)「露の玉の緒」(5例)「露の玉章」(1例)を伴うものがある。用例数は少ないといえようが、かなり多様な形で用いられていて表現が豊かであったことがわかる。これらの表現は、唯の「露」よりは実に細かく、眼の前の様子を生き生きと描写するような表現である。他に、「露」と似た表現としての「雲」も少なからず用いられている。主に「涙の雲」(3例)の形であるが、「その他」(16例)の例も多い。

涙を「露」で譬えることによって表現効果を高めていることは確かであるが、いくら細かく表現しても「露」からは大げさなレトリックという感じはあまりしない。だからといって、まったく大げさな表現がないかといえば必ずしもそうではない。

其風も和ぐ程の涙の露の雨を催させるであらう。(『マクベス』坪内逍遙、大正5

年3月、逍遙撰集5、p438)

何故御禮をば云はれぬか、と左の袖は露時雨、涙に重くなしながら、(『五重塔』

幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p152)

と思ひ廻せば娘気の脆き涙の村時雨の露ぞ置き添へて乾く間さへなかりしが(『うちわ車』斎藤緑雨、明治22年7月、斎藤緑雨全集7、p241)

黒目勝なる星眸の中に、万斛の露溢れんとし顰めたる眉の～(『女殺油地獄』坪内逍遙、明治24年10月、逍遙撰集8、p736)

後髪の一筋二筋、花の如き暎うるさげにかかり黒目勝なる星眸の中に、万斛の露溢れんとし顰めたる眉の遠山に愁雲なほほのかなり。(『めいどの飛脚』坪内逍遙、明治24年12月、逍遙撰集8、p736)

すでに述べたように、「露」は量的にも少ないし消えやすいという性格を有していることから、激しい涙を流す様子を連想することは難しい。「雨」とつながる場合には、ほんの少し降る雨を想定すると「霧雨・小雨・小糠雨」のような表現がある。しかし、「露雨」のようなものはないことからわかるように「雨」などにつながるのには不自然であるにもかかわらず、「露の雨」(1例)「露時雨」(1例)「村時雨の露」(1例)「万斛の露」(2例)と表現されている。「雨」などのように動的で激しさを伴うこともある表現と静的な「露」とのつながりはアンバランスである。さらに「万斛の露」も少々不自然なものといえよう。「少し・少なさ」の意味を持つ「露」と「大量」の意味を持つ「万斛」とがつながっていて、やはり文脈上均衡がとれない面がある。しかし、明治期以後「万斛の涙」⁸⁾は多用されていて、日本において大げささの代表的な表現として知られている。

涙の比喩として「露」が多用されているが、直喩がほとんど用いられていないことと、隠喩の豊富さが確認できた。基本的に「露」は量が少なく消えやすい性質をもっているため涙も静的で流す量も多くないのだが、こういう使い方の中にも繊細な表現が見られ、大げさなレトリックとして活用されてもいたことがわかった。

8) 羅工洙(2012)「近代における数字による涙の修辞」『日本近代学研究会』第37輯、韓国日本近代学会pp7-30

1.2. 「玉・珠」

涙の比喩として「玉・珠・球」の例が見られる。『日国大』の「玉・珠・球」の③には「その形が①に似ているものをいう。イ 水の玉の意で、露、水滴、水泡、または涙などをさしていう」とある。①の意味は「球形あるいはそれに近い形の美しく小さい石などで、装飾品となるものを総称していう」であるが、ともあれ「玉」が涙の譬えとして基本的に用いられていることが伺われる。「玉」は「露・水滴・水泡」の意からわかるように、多くの量を想定した譬えではない。

思ひはおなじ鮫人の涙珠なす許りなり。(『哲烈禍福譚』宮島春松、明治12年5月、明治文化全集22、p245)

唯口惜口惜と叫びて玉なす涙は芝生をひたし置き餘る露とや見ゆらん。(『女子参政蜚中楼』広津柳浪、明治22年、明文全19、p123)

口にこそ言はざりけれど、玉成す涙は点々と散りて零れぬ。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治30年、明文全18、p308)

中には痛さうに玉の様な涙をこぼすものがあるがね。(『此一戦』水野廣徳、明治44年3月、明文全97、p157)

唯時々球の様な涙が点々と零れ、頬に留つて金剛石の光を放つて居るに。(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p360)

途端、ハラハラと俊三の両眼から玉のようなる涙が溢れた。(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p179)

両眼に珠のやうな泪を湛えて俯向けば、堰を洩る一雫、可愛らしき鼻へ傳ふて流るを。(『清水越』金子春夢、明治29年6月、明文全36、p406)

熱湯に胸を湯かさる如く、湯気を欺むく玉の涙バラバラと膝に落かかりて。(『塙團右衛門』宮崎三昧、明治26年7月、明文全26、p212)

敏詮は実に腸も断るばかりで、湯玉の如き涙を流して居りました。(『西洋娘形氣』尾崎紅葉、明治30年4月、紅葉全集8、p363)

男の何語りてや打笑む顔の鮮に映れば、貴婦人の目よりは涙すずろに玉の糸の如く流れぬ。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治30年、明文全18、p179)

直喩には「玉なす涙」(8例)「玉成す涙」(1例)「涙珠なすばかり」(1例)「玉のやうなる涙」(1例)「玉の様な涙」(1例)「珠のやうな泪」(1例)「球の様な涙」(1例)の例が見

られる。他に「～を欺く」(1例)の例もある。「たま」の場合は三つの漢字表記があるために多様に見えるが、実際は「なす・ようだ」が少々見られる程度である。直喩の指標である「如し」(指標の場合は終止形で表わすことにする)はここでは2例あり、「湯玉・玉の糸」のように繊細な表現として用いられている。

おののく前髪をつるり滑りて、ハタリと黄泥に^{わうでい るみじゆ とも}涙珠を伴なつて墜ちたり。(『みれん』幸田露伴、明治23年1月、露伴全集1、p225)

ぼろりぼろりと膝の上に散らす^{なみだ お}涙珠の零ちて声あり。(『いさなとり』幸田露伴、明治24年5月、明文全25、p153)

言掛^{いひかけ}て葉^{はら}乱々々と。落す^{たまなみだ}壮士の玉泪に。赤心の限り現はれて。(『西の洋血潮の暴風』桜田百衛、明治15年、明文全5、p261)

先立つ者は^{さきだ もの なみだ たま}涙の玉に^{そで ひた}袖を浸しつ～(『蝶島紫山袈裟模様』高島藍泉、明治13年9月、明文全2、p174)

妾は空しく^{なみだ}涙の珠を、君が家の格子先に落して帰り来りぬ。(『花籠』永井荷風、明治32年6月、荷風全集1、p37)

又少女の^{またこむすめ なきごゑ}泣声が判然^{はつきりきこ}聞えて、^{きよ なみだ たま}清い泪の玉が^{ち お}ぼたぼたと地に墮ちるのが、～(『乞食』二葉亭四迷訳、明治40年7月、明治翻訳文学全集44、p326)

愛の^{あい かむり}栄冠^{しろ}ぞ^{かみ}白き髪 ^{なみだ たま}涙の珠玉に^{かざ}飾られて(『山口孤劍篇』、明治38年1月、明文全83、p373)

吮はるる^す婦は、^{うつく たま なみだ}美しい玉の涙を^{おと}はらはらと落す。(『房茶屋心中』泉鏡花、大正6年4月、鏡花全集17巻、p471)

^{うつむ}垂頭いた膝には^{こぼ}ほろりと溢れた涙が^{ゆかた}玉を結ぶ間もなく浴衣へ消込んで了つた。(『雨』広津柳浪、明治35年、明文全19、p29)

～前後も^{そぞろ}不覚^{はか}縋り着き熱き涙の玉の緒の絶て還らぬ果敢なさよ(『涙』斎藤緑雨、明治21年6月、斎藤緑雨全集6、p12)

隠喩は大きく「の」無しのもの、「の」を挿入するものとに分けられる。「の」無しのものには「涙珠」(1例)「涙珠」(4例)「玉泪」(1例)がある。これらの表現は「の」なしで、まるで一語のようにして表現効果を高めようとしたものといえよう。

一般的な隠喩は「涙の玉」(19例)「涙の珠」(4例)「涙の珠玉」(1例)のようなもので

ある。これと逆になっているものとして「玉の涙」(3例)がある。「涙の玉」と「玉の涙」は意味の上で異っている。「涙の玉」は、いわば「涙の粒」または「涙の雫」のようなものである。「玉の涙」は、「玉」が「粒」というよりは宝石のような鉱物としての「玉」である。そういう面から見ると、真正なる「涙」の比喩としては「玉の涙」のほうがふさわしいといえよう。他にも「の」なし(11例)の譬えがあるなど、多様な例がある。また、繊細な表現として「涙の玉の緒」(1例)も見られる。なお、「露」とつながった「玉」については前節で取り上げたので、「露の玉」の例は除外した。

「玉」も「露」のように静的で多くの量を連想しにくい「涙の粒」であるので、目許にある涙の粒をみて譬えたものである。従って、激しい涙を流す様子を表す時には他の語をもって譬えるべきである。

うへ した た さわ かない やう す みみ か おつ なみだ たまあられなき かな
上を下へと立ち騒ぐ家内の様子を耳にも懸けず落る涙の玉霰たまあられなすなすまでに悲し
みしが漸やうやくにして涙なみだをはらひ〜(『白露革命外伝自由廻延矢』井上勤、明治17年9
月、明治初期翻譯文學選、p104)

め なみだ たまあられ ひたひ ゆげ くも おこ
と眼には涙の玉霰たまあられ、額に湯気の雲を起し、(『浮木丸』尾崎紅葉、明治26年1月、
紅葉全集5、p228)

お雪の手を把とりて無言の涙はらはらと檻つづれ樓の袖に玉霰たまあられ時ならぬものを飛とばせしが(『う
ちわ車』斎藤緑雨、明治22年7月、斎藤緑雨全集7、p236)

りやうがん うか なみだ たまあられ ひと み
両眼に浮うかぶ涙珠の玉霰たまあられれ他に見られて〜(『巴里情話椿の佛』草廼戸主人、明治
17年7月、明治翻譯文學全集26、p196)

りやうがん うか なみだ たまあられ
両眼に浮うかぶ泪の玉霰たまあられ、(『巴里情話椿の佛』草廼戸主人、明治17年7月、明治翻譯
文學全集26、p190)

激しい涙の流し方を表す例としては、「涙の玉霰たまあられなす」(1例)「涙の玉霰たまあられ」(2例)
「涙珠の玉霰たまあられれ」(2例)「泪の玉霰たまあられ」(1例)「玉霰たまあられ」(2例)がある。のちに考察する「霰」
も涙の比喩として用いられているが、「玉霰」は二重的な比喩になっているのが特
徴的である。静的な比喩として取り上げられていたが、「霰」がつくことによって
涙を流す様子が激しいことを加味している。このような表現は、「露時雨」のよう
に大げさなレトリックとしての効果を高めているものといえよう。

1.3. 「雨」

涙を「雨」に譬えることについては、流行歌などを通して広く知られているものと思われる。『日国大』に「雨」の意味の一つとして、「たえまなくたくさん落ちそそぐもの、身にふりかかるものをたとえていう」「涙のあふれでるとえ」との記述があり、涙の譬えとして「雨」が多用されていることが辞書からも窺われる。量的にどれぐらい用いられているのかは不明確であるが、用例は古来多用されている例の一つといえる。では、近代文学における涙の比喩として「雨」がどのように用いられていたのかを、まず直喩の例から見てみよう。

か けう おも なんだあめ ごと
 家郷を憶ふて涙雨の如し(『乱調激韻』中里介山、明治37年8月、明文全83、p27
 9)

なみだ あめ ごと とこ ぬら
涙は雨の如くに床を濡しぬ。(『三人やもめ』『薄氷遺稿』北田薄氷、明治27年6
 月、『リプリント日本近代文学』p157)

国家ノ前途ヲ思ヒ身世ノ逆境ヲ歎ジ、覚エズ涕涙雨ノ如ク下ル。(『佳人之奇遇』
 東海散士、明治24年、名文全6、p108)2例

絶泣。涙球雨ノ如キモ私ニ於テハ肥肉脯鮓ヲ竹筒ノ中ニ置キ。(『新日本之青年』
 徳富蘇峰、明治18年6月、明文全34、p148)

なみだ きふう ごと お
涙は急雨の如く下つる。(『寒牡丹』尾崎紅葉、明治33年1月、紅葉全集別巻、
 p409)

しゅうりゅう
 且ツ説キ且ツ泣キ涙驟雨ノ下ルカ如シ(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年、p1ノ6
 0)

清二郎はお染の手を取つて、涙は雨の如くである。(『河内屋』広津柳浪、明治29
 年、明文全19、p115)

なみだ はる あめ はな かほ うほ
涙は春の雨のごと。華なす顔をば湿しけり。(『慨世士伝』坪内逍遙、明治18年2
 月、逍遙撰集別冊2、p570)

是二由テ之ヲ推セバ詩語ニ動モスレバ涙滂花トカ涙如雨トカ申ス熟字アリ(『訪
 事日録』森田思軒、明治18年3月、新日本古典文学大系明治編5、p468)

なみだ おち からだ ふる
涙は雨の様に落る、身体が顫へて来たので、(『初すがた』小杉天外、明治33年8
 月、明文全65、p77)

雷のやうな大きな声を出して、白雨のやうな涙を翻して啼たのは誰れた、(『月夜
 鴉』塚塚麗水、明治 29年12月、明文全26、p351)2例

将ニ哀別ノ涙雨滴ニ等シカラントス(『真理一斑』植村正久、明治17年10月、明文全46、p98)1例

雨よりも繁き涙溢れぬ。(『ふせやの雨』小日向是因訳、明治34年3月、明治翻訳文学全集31、p73)

母親の墓の前に^{うづま}蹲りたるままに動き得ず、涙は雨のふる程^{ない}泣て泣て、若い身にも似ず、(『対膺髓』幸田露伴、明治23年1月、明文全25、p31)

我が顔に^{そそ}澆がれたりし御涙の火の雨ほどに熱かりしこと、(『風流微塵蔵』「あがりま」幸田露伴、明治27年10月、露伴全集8、p313)

止め度^どもない涙の、雨かとはばかり^{そそ}濺ぐのであつたが、(『女詩人』鶉浜生訳、明治39年6月、明治翻訳文学全集5、p235)

飲めども^の嗜めども^か余る^{あま}涙は、時雨の如く^{なみだ}御膝に^{しぐれ}灑ぐを、(『不言不語』尾崎紅葉、明治28年1月、紅葉全集5、p99)

直喩の場合は、主に「如し」を用いたものが多い。「如し」(37例)「様だ」(2例)「等しい」(1例)「よりも」(1例)「ほど」(1例)「かとはばかり」(1例)とあり、明治20年代以降の言文一致時代に入っても「如し」の使用は多い。現代は「様だ」が圧倒的なのだろうが、特に明治期には「如し」が優先的に用いられている。「如し」には「ごと・如雨」の例が一つずつ見られた。普通は涙を「雨」に譬えているが、「雨」を「時雨」(1例)・「火の雨」(1例)・「白雨」(1例)・「聚雨」(1例)・「急雨」(1例)・に換えて大げささを増しているものもある。このような用法は、隠喩の用例に比較的多い。次は、隠喩の場合である。

に^にじう^{じう}よ^よそう^{そう} きず^{きず}ぐち^{ぐち} まなこ^{まなこ} かず^{かず} 涙の雨に某が、真情を頭はし申さん、(『自由太刀余波鋭峰』坪内雄蔵訳、明治15年、『明治初期翻訳文学選』p149)

右に^{みぎ}まろ^{まる} ひだり^{ひだり} ころ^{ころ} ころも^{ころも} そで^{そで} しぼ^{しぼ} 涙の雨を降らしけり(『禽獣世界狐の裁判』井上勤、明治17年、『明治初期翻訳選』p75)

想遣るだに^{おもひや} いた^{いた} 傷ましくて。不覚も^{おもはず} ふる^{なみだ} 泪の雨に。硯の海の^{すずり} 水容ましぬ。(『西の洋血潮の暴風』桜田百衛、明治15年、明文全5、p17)

傍聴するお光の胸には^{かたへぎき} 悲き事くやしき^{なみだ} 只一杯に満ち溢れ雨の泪の^{なみだ} ふりかかる袂を口にかみしめて^{なみだ} 覚えずそこに泣き伏したり(『捨小舟』石橋忍月、明治21年2月、明文全23、p194)

如何に御愁嘆あればとて其御涙の雨と降りて三途河の～(『巷説二葉松』宇田川
文海、明治17年1月、明文全2、p234)

此詩は是れ佛山翁の涙雨行にして大磯の於菟が十郎の跡を慕ふの情を写せしもの、(『露子姫』石橋忍月、明治22年11月、明文全23、p234)

とかく涙雨は人の身の秋にふるものなりけり。(『伽羅枕』尾崎紅葉、明治23年7
月、紅葉全集2、p39)

默然として天を仰ぎ、心無く行く雲に睨入りしま少時して両眼に湧出る涙熱
雨を降らす、(『奇男児』幸田露伴、明治22年11月、露伴全集5、p15)

指標のない隠喩の場合は「涙の雨」(58例)が主流をなしている。「涙雨」(6例)もある。「雨」がなくてもその場面の表現効果は十分であるが、涙を流す様子が雨のようであるという大げさなレトリック効果を生かそうとしていることが分かる。近代には「涙」と同義の「泪」(3例、「雨の泪」もある)の例も散見されるが、「雨」とのつながりはあまり見られなかった。隠喩の場合は「涙の雨」のように典型的な形で現われる場合もあるが、この形から外れている例も少々見られる。典型的な例から外れているものは「～の～」に含めた。また、注目すべきことは、『巷説二葉松』の例に「涙の雨と降る」のように「と」(9例)によって直喩の様に表した表現とか「涙の雨降る」(4例)のような表現とその他(7例)などがみられることである。直喩であれ隠喩であれ「雨」に代替させることにより、流す涙の量がおおいことに注目させるのである。また、「涙」をただの「雨」ではなく「熱雨」(3例)に譬えるものもある。

隠喩の場合は、上の例の他に「雨」をさらに細かく表現しているものもかなりある。

其風も和ぐ程の涙の露の雨を催させるであらう。(『マクベス』坪内逍遙、大正5
年3月、逍遙撰集5、p438)

元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかかり、(『風
流佛』幸田露伴、明治22年9月、明文全25、p9)

又も涙の雨の糸襦袢の袖にかかる時心の奥ぞ知られける(『涙』斎藤緑雨、明治21
年6月、斎藤緑雨全集6、p35)

儂^{わたし}や嬉^あしいのやら悲^みしいのやら途々^{みちみちない}泣^あて居^あましたト涙^{なみだ}の雨^{あめ}の露^{うれ}帯^{おび}びて愁^{うれ}ひに沈^おむ～(『善悪押絵羽子板』斎藤緑雨、明治19年1月、斎藤緑雨全集5、p22)

上の表現は、ただの「涙の雨」よりさらに細かく表現し、まるで顕微鏡で雨を観察しているかのような文になっている。しかし、「涙の雨」のほうは大げさなレトリックとしての想像力が発揮されるのに対し、上の例ではそこまではいかないという違いがあるように思われる。

次は「雨」と関連して、大げさなレトリックを十分に生かしている例である。

錦^{にしき}子はなほ暫^{しば}らくためらつて居^あた蓋^あし涙^{なみだ}の時^{とき}雨^{あめ}の晴^{はれ}間^まをまつので(『五月鯉』巖谷小波、明治21年、明文全20、p210)

何^{なに}故^ゆ御^ご禮^{らい}をば云^いはれぬか、と左^{ひだり}の袖^{そで}は露^{うれ}時^{とき}雨^{あめ}、涙^{なみだ}に重^{おも}くなしながら、(『五重塔』幸田露伴、明治24年11月、明文全25、p152)

見^み上^あくる男^{おとこ}に見^み下^{くだ}す女^{めづ}、見^みる目^め涙^{なみだ}の初^{はつ}聚^{しゅ}雨^{あめ}、互^{たがひ}にほつと苦^く笑^{わら}ひ、(『西洋娘節用』木下新三郎、明治20年1月、明治文化全集21、p580)

と思^{おも}ひ廻^ませば娘^{むすめ}氣^きの脆^{もろ}き涙^{なみだ}の村^{むら}時^{とき}雨^{あめ}の露^{うれ}ぞ置^おき添^そへて乾^{かわ}く間^まさへなかりしが(『うちわ車』斎藤緑雨、明治22年7月、斎藤緑雨全集7、p241)

眺^{なが}むる空^{そら}の北^{きた}は時^{とき}雨^{あめ}れて、君^{きみ}が涙^{なみだ}のふるか、(『冷熱』尾崎紅葉、明治27年5月、紅葉全集5、p330)

歎^{なげ}きつ謝^{わび}つ曇^{くも}りし声^{こゑ}に霖^{しづ}雨^{あめ}降^ふる涙^{なみだ}をやをら押^お拭^{ぬぐ}ひ上衣^{うはぎ}を～(『九死一生魯敏遜物語』横須賀橘園訳、明治12年8月、明治翻訳文学全集13、p25)

妾^{わたし}の心^{こゝろ}も推^お量^{りか}してト絶^た々^た注^つぐ涙^{なみだ}の村^{むら}雨^{あめ}露^{うれ}結^{むす}ぶ袖^{そで}を嚙^かみ絞^{しぼ}り～(『善悪押絵羽子板』斎藤緑雨、明治19年1月、斎藤緑雨全集5、p7)

はいとばかり袖^{そで}を顔^{かほ}に押^お当てて又^{また}はらはらと一村^{ひとむら}雨^{あめ}、(『稻むしろ』斎藤緑雨、明治32年11月、斎藤緑雨全集7、p295)

鎮^{ちん}守^{じゆ}様^{さま}の大^{おほ}祓^{はら}ちや、涙^{なみだ}の雨^{あめ}が降^ふつて一村^{ひとむら}洪水^{こうずい}だぜ、(『舞の袖』泉鏡花、明治36年4月、鏡花全集7巻、p453)

顔^{かほ}の勇^{いさ}威^{はひ}無く光^{ひかり}采^{さい}無く、五^い月^{げつ}雨^{あめ}の檐^{さみだれ}の雲^{のき}と涙^{なみだ}を放^{はな}らし落^おし居^あれるさまの醜^{みにく}くも醜^{みにく}きを、右^{みぎ}の肩^{かた}には恐^{おそ}ろしき～(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p240)

双^{もう}手^てを擴^{ひろ}げ拒^{ふせ}がずや、慈^じ悲^ひの涙^{なみだ}の雨^{あめ}雲^{あまぐも}も。(『花外詩集』児玉花外、明治37年2

月、明文全83、p317)

上の例は、現時点までに調べた異り語の表現全てを提示したものである。このようなものには「涙の時雨」(9例)「涙の露時雨」(2例)「涙の初時雨」(1例)「涙の初聚雨」(1例)「涙の村時雨」(2例)「涙の霖雨」(1例)「涙の村時雨」(1例)「涙の村雨」(3例)「涙の一村洪水」(1例)「五月雨の檐の雫」(1例)「涙の雨雲」(1例)の例が見られる。「涙」を流す様子を「雨」に譬えること自体が普通あり得ない表現であろうが、さらに強調して多くの量を連想させる表現としている。このような表現は、すでに提示した直喩の例にも現われていた。このことから、日本語では涙を流す様子として「雨」の類を巧く利用していたことが窺われる。

1.4. 「滝」

「涙」の譬えとして「滝」を用いることは、やはり理解に苦しむ。しかし、あくまでも現実性の足りないものではあるが、読者をして涙を流す状況、つまり悲しみや苦しみが甚だしいことを知らしめる役割をするには十分であると思われる。『日国大』には「滝」の意味として「急な斜面を激しい勢いで下っている水の流れ・懸岸から激しく流れ落ちている水」と記されており、原義的な意味を與えているのみである。この時の「滝」の譬えは、地形としての譬えというよりは「滝」から流れてくる「水」のことを表していると見るべきである。ともあれ、『日国大』に「雨」は「涙」の譬えとして用いられていることが提示されているが、「滝」にはそのことが書かれていないのである。では、「滝」は「涙」の譬えとしてどのように用いられていたのかを見てみよう。

彼は又忽ち泣き出して涙滝の如く、神経に異状でもあるではないかと思ふ位であるので、(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p347)

と案じ煩つて問へども答へず、一向に流す涙の滝の如く、果は声を立つるばかりに泣入るのに、(『紺暖簾』山岸荷葉、明治34年、明文全22、p303)

何故とは知らず瀧なす涙枕を浸して、(『懺悔』木下尚江、明治39年10月、明文全45、p263)

われや濺がむ、血と涙憎きに血をば、哀れには泪流さむ滝のごと。(『花外詩集』
児玉花外、明治37年2月、明文全83、p323)

と侯爵はまたもや滝のやうに流れ落る涙を拭ふ力もなく、(『乳姉妹』菊池幽芳、
明治36年8月、明文全93、p176)

澗然として臉を保ちかねし万行の涙は滝布の如くに潰下せる間に(『新粧之佳人』
須藤南翠、明治20年5月、『リプリント日本近代文学』p254)

直喩として用いられる場合の指標には、「如し」(16例)・「やうに」(4例)・「なす」(7例)・「ごと」(2例)が用いられている。「滝なす涙」のように古文でよく用いられている「なす」の例が比較的多く用いられている。譬えられている語の漢字表記は「滝」が大部分で、「瀑布」(1例)の例はあまりない。「雨」の譬えよりも甚だしい状態を表わす「滝」は、涙を流す人の心情を誇張して目立つようにしている。このことから見ると、『日国大』に「涙を流す譬え」としての「滝」の用法についての説明を入れた方がいいのではないかと思う。一方、隠喩の場合はどうなのだろうか。

両眼よりはふり落つる滝の涙と、息の迫る程な啜泣とで、(『古手紙』大谷繞石
訳、明治36年3月、明治翻訳文学全集32、p49)

涙を拭くと生憎ハンケチは絞るばかりの涙……それを見るとまた涙の滝は頬を傳はつて落ちて来ます。(『乙女心』石橋思案、明治22年、明文全22、p14)

涙は何日か滅ぶべき憂は涙の種を播き涙は憂の実を結ぶ憂は涙の泉なるか思溢れて漏れて漏るるなり涙は憂の滝なるか(『涙』斎藤緑雨、明治21年6月、斎藤緑雨全集6、p5)

身にふりかかるいましめの答はきびしき雨霰たざりて落つる紅涙の袖に流れて滝となるらむ(『社会主義集』「鳥屋の娘」児玉花外、明治36年4月、明文全83、p298)

西行あまり御あさましさに、滝と流る熱き涙をきつと抑へて、(『二日物語』幸田露伴、明治25年5月、露伴全集5、p552)

隠喩としての表現には「涙の滝」(5例)「滝の涙」(2例)が見られるのみであり、「雨」ほどは好まれていないようである。また「滝と流るる」のように「と」(2例)が用いられた例もあるし、「の」を挿入しない表現もある。とにかく、「涙」を「滝」に譬えて表現

することは実に大げさな表現法の断面を見せているといえようが、「滝」にも細かく描写して表わすこともある。

落つる涙は滝津瀬の糸の乱れに狂へる如く～(『損辱』内田魯庵訳、明治28年6月、明治翻訳文学全集45、p44)

涙は滝つ瀬の如くせぐり来るを袖以て拭ふを、(『八重桜』三宅花圃、明治23年4月、明文全81、p118)

恋人が涙の文字は幾筋の滝のほとぼしりにも似て、気や失なはん心弱き女子ならば。(『軒もる月』樋口一葉、明治28年4月、明文全30、p105)

上を下へと立ち騒ぐ家内の様子を耳にも懸けず落る涙の玉霰たまあられなすまでに悲しみしが漸やうやくにして涙を払なみだひ～(『白露革命外伝自由廻征矢』井上勤、明治17年9月、明治初期翻譯文學選、p104)

上例のように「滝津瀬の糸・滝つ瀬・幾筋の滝・玉霰滝」と表わすことにより、唯漠然とした「滝」のイメージをより細密化している。しかし、このような表現は上の4例に過ぎず、直喩や隠喩で提示したような慣用的な表現を用いているのが普通である。「雨」にも増して大げささを表わす「滝」は近世の資料にも多数見られるため、やはり近代特有のものとはいえないけれども、近代文学にも巧く生かしていることがわかった。

2. 自然系統

2.1. 「地形と水」

ここまでの用例の分析では、自然の範疇に入るもののうち比較的多用されているものを集中的に考察してきた。ここでは、多用されていないものうち「地形」と「水」関係のものを総合的に見てみたい。「滝」の場合は用例が多かったため2・4で考察したので、ここでは省略する。まず、「水」そのものに譬えたものを見てみよう。

きのふけふ 此こ 處ち 送られ涙の水の手向を受て卵塔一掬の塵となりたる新し

き佛の眠る所なり。(『無気味』嵯峨の野おむろ、明治20年、明文全17、p204)

それなのに涙腺は無理に門を開けさせられて熱い水の堰をかよはせた。(『武蔵野』山田美妙、明治20年11月、明文全23、p8)

互ひに顔を見合してボロボロ落す涙の水、一升三合ほどなるべし。(『日ぐらし物語』幸田露伴、明治23年4月、露伴全集1、p350)

枳棘からたちをもて背うを鞭むちてよ、歎息うげの呼吸いき涙の水、(『いさなとり』幸田露伴、明治24年5月、明文全25、p168)

涙といふ情けの水はいかなる女神めがみ ゆあ あふれの浴みせし溢水あふれにやあらん、(『骨堂に有限を観ず』星野天知、明治26年6月、明文全32、p218)

「水」は唯の液体の表現であって、特に「地形」を連想させるものではない。涙の譬えとしての「水」の例には「涙の水」(4例)「情けの水」(1例)「その他」(1例)が見られ、直喩の例は見られない。辞書には涙の譬えの用法について説明や例が載せられていないが、実際の文学作品には用例が見られる。この「水」だけを用いた例を見たのは、はたしてどれぐらいの涙を流しているのかはわからない。一方、山田美妙の「勢い水の堰」の例からは、激しい涙を流している様子が受け取れる。また、幸田露伴の例文では「一升三合ほど」とつながっているので、前に考察した「滝」よりは遙かに少ない量であることがわかる。いずれにせよ、唯の「水」よりはレトリックの効果が高いことは確かであり、どういう語につながるかによって大げさの表現も可能であったと言えそうだ。

次は「泉」の例である。『日国大』によれば、意味の一つとして「(①を比喩的に用いて)ものごとの出てくるもと。源泉」がある。①の意味は「(出水の意)地中からわき出てくる水。また、そのわき出る場所」である。比喩的に用いられていることは確かであるが、「涙」の比喩であることは明示されていない。

此時紅涙こうるいふつぜん弗然あたかとして恰いはほも巖いほを破ほどつて迸ほどばしる泉いづみの如ごとく余わきいでが胸中より湧出たり。
(『無気味』嵯峨の野おむろ、明治20年、明文全17、p208)

則子涙湧泉なんだゆうせんノ如クナラン(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年、p2ノ54)

闇を見つめし吾眼は涙泉め いづみの如く湧けるを知らざりき。(『青蘆集』徳富蘆花、明治35年、蘆花全集3、p435)

其ま^{かみし}ま嘯^{かみし}締めて俊子を視た、涙は又泉のやうに湧^わくのである。(『女夫波』田口掬汀、明治37年1月、明文全93、p336)

やさしい愛の言葉は耳から電^{でんき}気^{でんき}の様に全身にしみ渡る。涙は泉の様に湧^わく。(『自然と人生』徳富蘆花、明治30年8月、蘆花全集3、p128)

泉なす涙^{さんづがわ}に三途川の水の増^{まさ}りなば、(『うき世』磯貝雲峰、明治22年、明文全32、p170)

直喩の場合、「如し」(5例)「ようだ」(2例)「なす」(1例)が用いられている。大部分が「泉」となっていて、動詞「湧く」とつながるのが特徴である。勿論、唯の「水」と比べると「泉」の方がはるかに流す涙が多いことが想像できる。しかし、「泉」それ自体は大げさではあるもののどれぐらいの規模であるかについては明確ではない。辞書的な意味から見れば「泉」の規模はそれほど大きいとは思われないが、涙を「泉」に譬えることによって激しい涙であることを表現するという効果は十分に発揮されると思われる。同じ「泉」であっても「湧泉」とすることにより力動感のある表現になっているものもある。では隠喩の場合はどうだろうか。

棼^{けいぜん}然^{あお}として青ざめたる顔に涙^{なみだ}の泉源^{いづみ}はや涸^かれてか、露^{つゆ}さへ帯^おばで～(『鏡花縁』尾崎紅葉、明治26年1月、紅葉全集別巻、p104)

遺恨^{いこん}、残念^{ざんねん}、万斛^{ばんこく}の泉源底も知れぬ此うらみそもそも何したら晴らせやう。(『白玉蘭』山田美妙、明治24年1月、明文全23、p47)

私の涙^{なみだ}の泉^{いづみ}を焼^やき涸^からしたものでありました。(『新春』徳富蘆花、大正7年4月、蘆花全集10、p320)

爾^{なんぢ}が心の悲哀^{はいがい}、万斛^{ばんこく}の泉、之を酌^{しやく}んで共に泣くものは誰ぞ?(『富士2』徳富蘆花、大正15年2月、蘆花全集17、p216)

吾れ知らず言ひて、涙は新^{あらた}に泉と湧^{いづみ}きぬ。(『不如帰』徳富蘆花、明治33年1月、蘆花全集5、p265)

隠喩の場合には「涙の泉源」(1例)「涙の泉」(5例)「万斛の泉源」(1例)「萬斛の泉」(1例)「その他」(1例)の例が見られる。基本的に「～の」の形式になっている。ここでも、ただの「泉」では足りないからか、「万斛」に修飾されることによりやはり大

げさの効果を上げている例もある。

次に「谷」の例である。「谷」は地形そのものであるが、涙の譬えとして使う場合には水の流れない乾いた「谷」のことを指すのではない。

底は即ち涙の谷、波だつものは暇乞の名残にて、(『帰省』宮崎湖処子、明治23年6月、明文全36、p79)

身を生活の競争場たる涙の谷に置く人は、春に逢へども浮立ず、(『聯島大王』古宮山天香、明治20年、明文全6、p323)

一度恋の失望より多涙の谷に臨ましめば、其急激奔落する勢ひは復止む可きに非ず。(『人世の別離』星野天知、明治24年、明文全32、p142)

人世固より非事多く不如意憂苦の非物に満てる涙谷なりと言ふとも、(『茶祖利休居士』星野天知、明治26年2月、明文全32、p210)

直喩の例はなく、隠喩の例としては「涙の谷」(12例)「泪の谷」(1例)「多涙の谷」(1例)「涙谷」(1例)がある。「溪谷」に流れる「水」のようなものに譬えているので、これ自体が誇張表現であるといえよう。

腹の底より迫来る涙の淵に泣き沈みぬ、(『鉄仮面』黒岩涙香、明治25年12月、明文全47、p139)

されば頼もしからぬ男に一生を過られて、涙の淵瀬に浮き沈みしたる後、(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p275)

茲に初めて恋しい巴里を離れると心付くと、涙は忽ち瀬を切つた如く、止め度もなく溢れるのであつた。(『椿姫』長田秋濤、明治36年、明文全7、p352)

世に詫びしうき身のすゑを、涙のいけともなしはてて、(『片羽のをしどり』馬場孤蝶、明治27年1月、明文全32、p300)

「淵」の例には「涙の淵」(3例)「涙の淵瀬」(1例)「瀬を切つた如く」(1例)「涙のいけ」(1例)がある。「淵」は「水がよどんで深くなったところ」、「瀬」は「水が浅いところ」、「いけ」は「水をためたところ」であるので、当然ながら涙を流す量が多いことの譬えである。次の用例は、涙を流す量や流し方がこれまでとは異なる例が見られる。

涙の川も要なしと退け難からむ、「片羽のをしどり」馬場孤蝶、明治27年1月、
 明文全32、p308)

或は社会を以て濺涙の河となし、「政海之新潮」竹越三叉、明治28年8月、明文
 全36、p92)

神も佛も無き事かとさすが男々しき心根も、千々に砕けて涙川、流るる末は袖
 にさへ、せき止め兼ねしかこちなき、「わか松」木村曙、明治23年1月、明文全81、
 p251)

ふれて涙河落ちて分れて西東有情の人の方に流れぬ。「同情録」児玉花外、明治
 37年2月、明文全83、p327)

戸外に待たせて在た馬車へ腰を下したかと思ふと疾や堰を切る大河の流、壙へ
涙が一度に切れて、手疾く手布に深く面を掩ふて了つた。「椿姫」長田秋濤、明治
 36年、明文全7、p284)

何か独言を云つて思はず顔を上げ墓標を見ると生憎泪の洪水が目録の堰を突破
 ります。「乙女心」石橋思案、明治22年、明文全22、p14)

因テ鳴咽絶泣シ涙ハ湘江ノ水ニ似涓々流ヲ断タス(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治
 13年、p1ノ51)

生死唯夕郎ノ命スルママナリト涙涸ハ流レテ湘江ニ似タリ(『鴛鴦春話』和田竹
 秋、明治13年、p3ノ24)

八重涙ハ江流ノ如ク喉ハ土塞ノ如ク～父母八重ヲ見涙ヲ含シテ云(『鴛鴦春話』
 和田竹秋、明治13年、p1ノ65)

操右衛門只夕眼涙ヲ収メ百方勤慰シテ云～今江河ヲ決シテ涙ト為スト雖トモ(『
 鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年、p2ノ3)

涙流レテ川ヲ為シ腸断テ九回ス(『西洋探検』加藤政之助、明治12年7月、『リプ
 リント日本近代文学』p46)

「川」系統の涙の比喩には、「涙の川」(1例)「濺涙の河」(1例)「涙川」(4例)「涙河」(1
 例)「大河の流れ」(1例)「泪の洪水」(1例)「江河」(1例)「江流」(1例)「その他」(1例)が
 ある。「川」関係の用例はさほど多くはないが、多様な形で現われている。直喩と
 しては、「似・似たり」の例が見られるのみである。涙を流している様子を「川」に
 譬えていることは、それ自体が実に大きな誇張のレトリックである。しかし、「川
 」類にも段階があって、同じ比喩であっても一律ではない。平凡な「川・河」もある

し、雨がたくさん降ることによって「洪水」となることに譬えたり、大きな「河」の流れである「大河の流れ」としたりしている。さらに、「湘江」は「中国の大きな川の一つで、長江右岸の支流」であるが、和田竹秋はこのとても特異な川の名前に譬えている。和田竹秋は「中国の、揚子江と黄河」を表す「江河」の例まで挙げていて、譬えとしては最大級の比喩をしているのが特異であるといえよう。

譬を腸が斷るる悲みとはかくやあらんと思はれて今一刻が涙の海轟く胸の波鎮
 まず(『善悪の岐』中島湘煙、明治20年11月、明文全81、p72)

噫憂き世かな涙かな浮世の涙の海なる哉(『涙』齋藤緑雨、明治21年6月、齋藤緑
 雨全集6、p5)

其眼を看よ、これぞ涙を以て孕干する海とこそ云べけれ。(『春情浮世の夢』河島
 敬蔵、明治19年5月、明治文化全集22、p567)

白い首筋に落ちた、雫は只一滴の雫でも、あらゆる男の、～それが擴がつて流
 れて、涙の大海と漲る中へ、女と二人で溶けてしまひたいと、輝一は思ふ。(『そら
 灶』大塚楠緒子、明治42年5月、明文全81、p369)お八重が目もと恨みと恋の
 二瀬川満くる潮ぞ涙なる同じ思ひの～(『夜嵐於衣花迺仇夢』鈴木金次郎編、明治
 19年11月、『リプリント日本近代文学92』p60)

「川」より大きい譬えとして使用するのが「海」であり、流す涙の甚だしい量を表す極限の例であろう。「涙の海」(7例)「涙の大海」(1例)「潮」(1例)「その他」(1例)の例がある。「海・大海・潮」のように、これ以上想像できないほどの大げささである。ここでは「川」で見たような具体的な名称は使われていないけれども、大げさなレトリックとして最高峰に達しているといえよう。

ここでは「地形と水」関係の涙の譬えについて考察したが、「地形・水」を利用したスケールの大きい譬えにより大げさの効果を十分に発揮していたと思われる。

2.2. 「降雨」関連

次に、同じ自然ではあるが空から降ってくる何かに譬えたものを中心に考察してみよう。その代表は「雨」であるが、用例の数が多いことからすでに1.3で具体的

に考察したのでここでは省略することにする。「雨」を代表とする類似語は多用されていたが、その他の「降雨」関係の譬えはさほど多くなく種類も多様ではない。では、どういうものがあるのかを見てみよう。

おほつぶ 大粒な涙は霰の如くハラハラとお玉の膝に落ちた(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p245)

と急来る涙は漕々と、膝に玉走る霰の如し。(『亀甲鶴』小栗風葉、明治29年12月、明文全65、p195)

げんざ 左衛門切齒に音たて、熱涙膝に落て霰のごとし。(『伽羅枕』尾崎紅葉、明治23年7月、紅葉全集2、p56)

涯し無き追憶に、涙は急霰の如くハラハラと母の墓上に落ちかかりぬ。(『乱雲驚濤』赤羽巖穴、明治39年、明文全84、p347)

其の八時間を大声揚げて、荒くれた眼から霰のやうな涙を落しながら泣き通したとある。(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p292)

治郎作両眼より霰の涙しぼりて鍬一面の掌に於雪が背を撫で、(『奴の小刀』村上浪六、明治25年6月、明文全89、p11)

身にふりかかるいましめの答はきびしき雨霰たがりて落つる紅涙の袖に流れて滝となるらむ(『社会主義集』鳥屋の娘、児玉花外、明治36年4月、明文全83、p298)

堪へかねたる涙はらはらと膝に玉走る霰の、見る間に消ゆる命は惜や、(『七十二文の安売』尾崎紅葉、明治24年3月、紅葉全集2、p375)

三年の幻影はかほるがほる涙の狭霧の中に浮みつ。(『不如帰』徳富蘆花、明治33年1月、蘆花全集5、p265)

睫にばかり露と成る涙の霧の濡色に、艶あるばかり描き出す。…(『彩色人情本』泉鏡花、大正10年1月、鏡花全集21巻、p172)

彼等は涙の浪に揺られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ付けられる。(『倫敦塔』岩波文庫、p9)

愛情は花に似たり一朝にして摧く、涙は氷に似たり流るるも味なし、(『小説家の着眼』巖本善治、明治20年、明文全32、p23)

親子の胸も春風に涙の水やや解て吉左右あるを~(『巷説二葉松』宇田川文海、明治17年1月、明文全2、p244)

「雨」の他には「霰」が主として用いられている。「霰の如く」(1例)「霰の如し」(3

例)「急霰の如く」(1例)「霰あられのやうな涙」(1例)の直喩がその例である。「霰」は唯の水滴ではなく粒状のもので涙を流す様子が荒いことを指しているが、冷たい感じがする。そういう面から見ると、尾崎紅葉の「熱涙ねつるみびぎ膝おちに落あられて霰のごとし」における「熱涙」は何となく似合わない表現になっている。隠喩の例には「霰の涙」(1例)「雨霰」(1例)「霰」(4例)があり、「の」介入のものは少ない。この「霰」は、「玉」のところで見たように「玉霰」の例が多用されていたことから涙の重要なキーワードであったといえよう。

また、相対的に涙を流す量が少なく、落ち着いているように見えるものに「涙の狭霧」(2例)「涙の霧」(1例)がある。他に「涙の浪」(1例)もあるなど、用例は少ないが非常に独特な表現を使っていたといえよう。「氷に似たり」(1例)「涙の氷」(2例)のように冷たい涙を「氷」に譬えているものも特異な表現である。

降雨関係のものは「雨」が圧倒的に多く「霰」も少々用いられているが、他はそれほど多様ではなかった。

3. その他

本節では、前章までに取り上げて考察してきたもの以外を対象にし、涙をどのように譬えていたのかを見てみたい。涙の主な比喩については1や2で考察した通りである。そういうわけで、これから取り上げる例はいくつかを除いて特殊な例が多いといえよう。

「種」は比較的多用されているもので、以下のものである。

か ない ひ と う わ さ き なみだ たね よ びじん うま き
 家内の人の噂するを聞くも涙の種となる世に美人と生れ来て(『白露革命外伝自由廻征矢』井上勤、明治17年9月、明治初期翻譯文學選、p101)

も と とほ むら やつら きやうぐう なみだ たね みな
 固の通り村の奴等はおなじ境遇、涙の種も悉尽になる、(『冠弥左衛門』泉鏡花、明治26年5月、鏡花全集1巻、p76)

「種」の場合は「涙の種」(19例)以外の形がないことから、完全に慣用的な表現になっていることがわかる。特異なことは、「涙の種」は他の表現とは異り、現在

涙を流している様子を表しているのではない。つまり、涙そのものを譬えたのではなく「涙」を催させるような何かの憂い事や不吉なことなどを譬えているのであり、それが心配になるといういわば「心配事」の意味であるので、ここまでに取り上げてきた譬えとは性格を異にしていることがわかる。

そして女はそのきれいな明かな眼に、やすらかなきよい、たのしい涙を流し、あついで日に天一杯になる宝石のやうに輝き、(『女主人』山田枯柳訳、明治39年2月、明治翻訳文学全集45、p225)

きらめく金剛石のやうな涙の玉はやがて老人が盃の中に落ちた。(『移転』上村清延訳、明治39年7月、明治翻訳文学全集45、p305)

水晶の様な涙の球は、湿うて光を放つ目から、(『玉を懐いて罪あり』森鷗外、明治22年3月、鷗外全集1巻、p149)

と、熟と姑を瞻つて、睫を貫く涙の露は、水晶の数珠に異らず。(『伊達羽子板』泉鏡花、大正6年1月、鏡花全集17巻、p187)

涙は止めんとして止めあはず、水晶の珠数俄に断れて、留まらぬ珠のばらばらと緒より乱れて落つるが如く、泣然として泣きに泣きたり。(『天うつ浪』幸田露伴、明治36年9月、明文全25、p267)1例

～二点の真珠のやうなる涙はきらめきぬ。(『月かげ』馬場孤蝶訳、明治36年5月、明治翻訳文学全集32、p66)

涙が真珠の如く頬を傳ふて居る。(『思出の記』徳富蘆花、明治34年5月、蘆花全集6、p456)

王の眼からは、涙がほろほろと落ちて銀髯を傳はつて、真珠の玉を其中に宿らせた。(『海の藻屑』桐生悠々生訳、明治35年8月、明治翻訳文学全集44、p89)

涙、貫珠の如し。(『本朝虞初新誌』菊池三溪、明治16年10月、新日本古典文学大系明治編3、p36)

霜夜の虫の鳴く音淋しく操立つるを見たまへと、涙は念珠の糸をしめして(『霜夜の蒸し』大橋乙葉、明治23年、明文全22、p89)

涙はまた「宝石」類に譬える場合もある。「宝石のやうに輝く」(1例)「金剛石のやうな涙の玉」(1例)「水晶の様な涙の珠」(1例)「水晶の数珠に異らず」(1例)「真珠の数珠」(1例)「真珠のやうなる涙」(1例)「涙が真珠の如く」(1例)「真珠の玉」(1例)「涙

貫珠の如し(1例)「念珠の糸」(1例)のような非常に稀な例が見られる。「宝石」関係の例は上の例が全てで、「玉」の場合は明確に「真珠・貫珠」と表現しているのでここに入れた。また「念珠の糸」は少々性格が異なるが、やはり便宜上ここに入れた。

全般的に見ると、「宝石」関係のものには直喩の形態が目立つことも特異な現象である。上のような例は、どちらかといえば激しい涙を流す様子ではなく静的なものである。ここまで取り上げてきた涙の表現は、涙を流す様子に美的な感情を持ち込んでいないものであったといえようが、「宝石」類は涙の美しさを表す表現であるといえよう。

他にもまだ取り上げていない例があるのだが、紙面の関係上、簡単に紹介して終えることにする。

涙の糸(『草枕』夏目漱石、明治39年)、(『トルストイ』山口孤剣篇、明治37年)

老眼の涙糸の如く、(『雪紛々』幸田露伴、明治22年)

涙漕々糸の如し。(『雪紛々』幸田露伴、明治22年)

豆の如き涙(『細君』坪内逍遙、明治22年)

豆粒のやうな涙(『かた鶉』内田魯庵、明治32年)

大粒の空豆ほどの血の涙こ(『日ぐらし物語』幸田露伴、明治23年)

涙煙の如く(『みみずのたはこと』徳富蘆花、大正2年)

熱湯の涙(『女殺油地獄』坪内逍遙、明治24年)

熱鉄の一涙(『毒朱唇』幸田露伴、明治23年)

懺悔話し涙は釜の湯と沸て湯気立ち登る(『十二ヶ月』斎藤緑雨、明治29年)

涙は湯となりて(『わが死』木内愛溪生訳、明治26年)

真の涙も他には南京玉位(『風流微塵蔵』「きくの浜松」幸田露伴、明治26年)

火のやうな涙(『声鑿』泉鏡花、明治42年)、(『紫手網』泉鏡花、明治42年)

火の様な熱い涙(『鳥影』石川啄木、明治41年)

涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である。(『雲は天才である』石川啄木、明治39年7)

涙を他の何かに譬えた例には「糸・豆・豆粒・空豆・煙・熱湯・熱鉄・釜の

湯・湯・南京玉・火・樹脂」などがあり実に色々な事物に譬えていることがわかる。これらは、各文学作品に現われている登場人物が涙を流すときの様子、状態、表情などをうまく譬えて、読者をしてその心情を推し測らしめる重要な役割を果たしていたものと思われる。

Ⅲ. おわりに

近代における涙に関する表現は実に種々あるが、今回は涙が何に譬えられたのかを中心に考察してみた。元来、涙を流す様子を表すとき、レトリックの効果に頼らないでそのまま表現しても読者にその心情を伝えるのにそれほど問題はない。しかし、涙を流す様子が静的であれ動的であれ、修辭なしの表現よりは何か譬えたほうが登場人物の状態、延いては心情までよく把握できると思われる。つまり、中村明が指摘しているように「そのまま言いあらわすこともできるが、送り手としてはそれを強調したい」という作者の気持が反映されているといえるのである。

それで、近代における文学作品に現われる涙の譬えを調べたのだが、その結果、次のような用法の見られることが明らかになった。

まず、直喩か隠喩かについて見ると、何に譬えるかによっても異なるが、全般的に見ると隠喩的な譬えが好まれていた。直喩の場合は多様な文体が見られたが、文語文や言文一致の未完成の影響のためか「如し」の形が多かった。隠喩の場合は「涙の～」が大部分で、「～の涙」は非常に少なかった。その他に、特別な形式のない隠喩もかなりあった。

次に何に譬えられたのかを見ると、殆んどが自然と関係のあるものであった。中でも水と関係のある地形が多かったことが特徴的である。地形では「滝」が一般的に用いられていて、「泉・谷・川・海」などの表現も好まれていた。また、自然のうち「降水・降雨」関係のものでは、「露」と「雨」が一般的に用いられていたと思われる。その使用量が多く、多様な用法もあることからそのことが窺える。他に

は「水」「霰」や「狭霧・霧」などが用いられているのも特異であった。「玉・珠・球」の場合は加工されたものとも天然のものとも取れるだけでなく、どちらも取れない「粒」としての用法もあり多面性を持っていたが、多用されている例の一つであった。用例は少ないけれども、「真珠・水晶・金剛石」のような宝石類や「豆・糸・湯」などのその他の例もあり、実に細かい譬えをしていることがわかった。

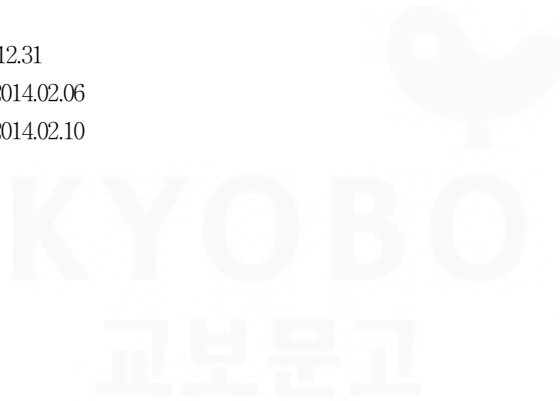
最後に大げさなレトリックの問題について見ると、譬える内容によって異ってくるのがわかる。簡単にいえば、「露・玉・種・豆」のようなものは目許あたりにある涙の様子を表して大げささの度合いは殆んどないといっている反面、「雨・霰・滝・川・海」などのような譬えは、涙を流している様子や量が甚だしいことを物語っているのである。また、「露・玉」などはどういう語に修飾されるかによって甚だしい表現も可能であることがわかった。

このように、涙を他の言葉に換えて表現することによって、登場人物の心情、あるいは作家の感情移入の様子が明白になっていくことがわかったように思われる。しかし、本稿では近代文学作品における用例のみを対象に考察したので、近代における使用の実態はある程度明らかになったものの、近世や現代はどのようなかといった問題は未知のままである。比喩表現には急激な変化が起るとは思わないけれども、時代の反映もあると思われるので、これを契機として時代的変遷についての考察に歩を進める必要性を感じている次第である。

참고문헌

- 世良正利(1970)『日本人の表情』『日本人の性格』朝倉書店、p35
- 中村明(1977)『比喩表現の理論と分類』秀英出版、p18
- 中里理子(2004)『『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて—』上越教育大学研究紀要第24巻第1号pp304-316
- 羅工洙(2010)『近代における『紅涙』について』『日本近代学研究』第30輯、韓国日本近代学会pp7-31
- 羅工洙(2012)『近代における数字による涙の修辞』『日本近代学研究』第37輯、韓国日本近代学会pp7-30
- 羅工洙(2013)『近代における感情表現としての涙のレトリック』『日本近代学研究』第43輯、韓国日本近代学会pp7-33

- ❖ 투고일 : 2013.12.31
- ❖ 심사완료일 : 2014.02.06
- ❖ 게재확정일 : 2014.02.10



Abstract

近代の「涙」は何に譬えられたか

羅工洸

本稿は、近代における文学作品に現われる涙の譬えを調べたのだが、その結果、次のような用法の見られることが明らかになった。

まず、直喩か隠喩かについて見ると、何に譬えるかによっても異なるが、全般的に見ると隠喩的な譬えが好まれていた。直喩の場合は多様な文体が見られたが、文語文や言文一致の未完成の影響のためか「如し」の形が多かった。隠喩の場合は「涙の～」が大部分で、「～の涙」は非常に少なかった。その他に、特別な形式のない隠喩もかなりあった。

次に何に譬えられたのかを見ると、殆んどが自然と関係のあるものであった。中でも水と関係のある地形が多かったことが特徴的である。地形では「滝」が一般的に用いられていて、「泉・谷・川・海」などの表現も好まれていた。また、自然のうち「降水・降雨」関係のものでは、「露」と「雨」が一般的に用いられていたと思われる。

最後に大げさなレトリックの問題について見ると、譬える内容によって異ってくるのがわかる。簡単にいえば、「露・玉・種・豆」のようなものは目許あたりにある涙の様子を表して大げさの度合いは殆んどないといっている反面、「雨・霰・滝・川・海」などのような譬えは、涙を流している様子や量が甚だしいことを物語っているのである。

このように、涙を他の言葉に換えて表現することによって、登場人物の心情、あるいは作家の感情移入の様子が明白になっていくことがわかったように思われる。しかし、本稿では近代文学作品における用例のみを対象に考察したので、これを契機として時代的変遷についての考察に歩を進める必要性を感じている次第である。

Key Words : 近代の涙(Tears of Modern)、近代文学(Literature of Modern)、直喩(a Simile)、隠喩(a Metaphor)、大げさなレトリック(the Rhetoric of Exaggeration)